

第2回名古屋大学博物館企画展記録 フーフェラントと幕末の蘭方医—毛利孝—コレクションから

Record of the 2nd NUM Special Display “C. W. Hufeland and Japanese Medicine in Edo Period”, with Supplementary Explanatory Notes

西川 輝昭 (NISHIKAWA Teruaki)¹⁾

1) 名古屋大学博物館

The Nagoya University Museum, Chikusa-ku, Nagoya 464-8601, Japan

会場：名古屋大学博物館

会期：2003（平成15）年10月1日（水）から11月3日（月）、祝休日を除く月・火曜日休館

この記録は、会期中に会場で配布した展示解説パンフレットにもとづき、解説部分を「である調」に変えるなど、わずかに改訂を施したものである。枠内には、展示パネルやケース内の解説文章をそのまま再録した（ただし、ルビは省略）。鍵かっこ内は、西川による注記である。

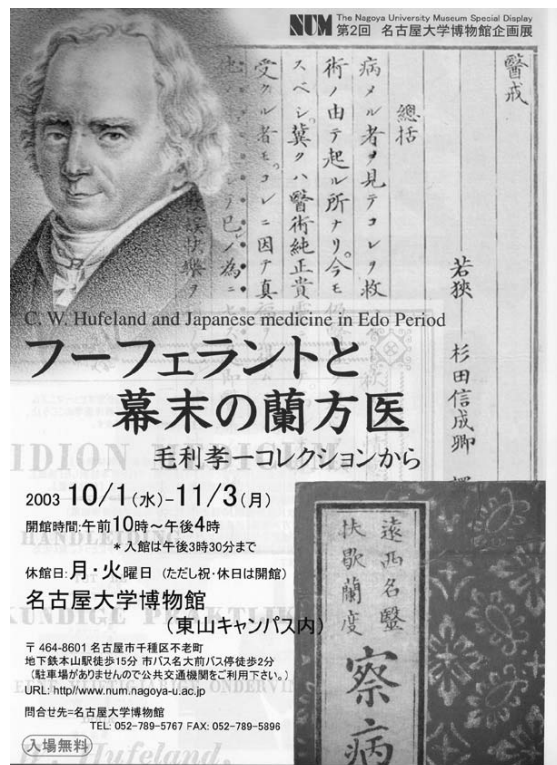


図1 第2回企画展チラシ

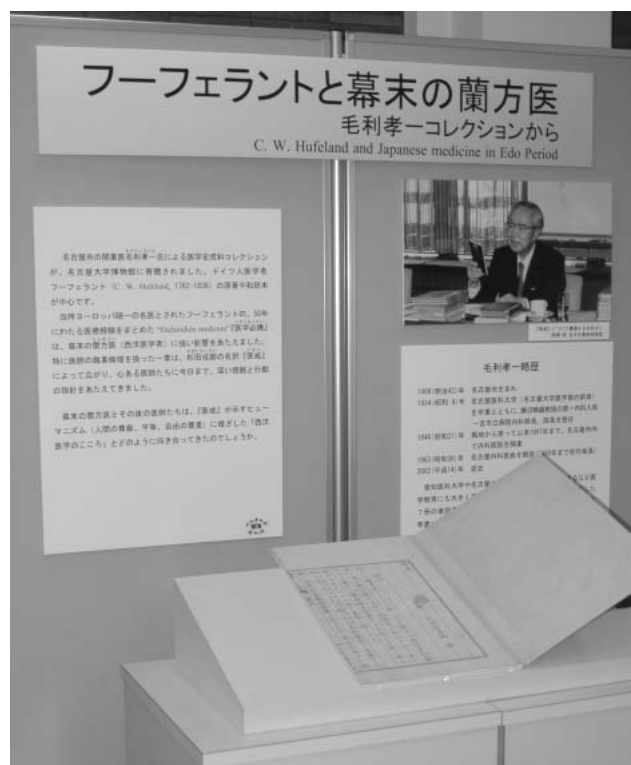


図2 展示導入部

導入部 (図2)

パネル1

ごあいさつ

故毛利孝一先生(1909～2002年)の貴重な医学史資料148点を当名古屋大学博物館にご寄贈いただきましたのは、昨年夏のことでした。虫喰いなど大きな損傷の修復や整理が一段落したのを機に、古和洋書を中心とした“毛利フーフェラントコレクション”の一部を第2回企画展として紹介することにしました。

毛利先生は、学生時代に『医戒』という本(フーフェラントの医学書に書かれている医師の心構えをまとめたもの)から受けた“病人に対して人間として当たり前で接する”という感動を日々の診療の基本とするとともに、それを医の倫理の根本を探る研究へと深められました。いろいろな分野でモラルの低下が問題となっている今日ほど、毛利先生が座右の銘とされた“人間として当たり前で接する”という『医戒』の精神が、強く求められている時はないかもしれません。

本企画展が、幕末における日本人と西洋医学との出会いの歴史とともに、『医戒』の精神を思い起こすきっかけになることを願っています。

毛利フーフェラントコレクションをご寄贈いただいた毛利美枝子様と長尾友子様、コレクションの修復のために多大のご援助をいただいた愛知県内科医会様(太田 宏会長)に深甚の謝意を表します。さらに、本企画展の開催にあたり、次の方々には種々のご援助やご高配をいただきました。心からお礼を申し上げます。愛知県内科医会、医道顕彰会、川本宏子、小学館、高橋 昭、田崎哲郎、適塾記念会、手塚プロダクション、名古屋大学医学部学友会、日本医師会、日比野 進、不破洋、本荘平八、山内一信、米田該典(敬称略)。

平成15年10月1日
名古屋大学博物館長
足立 守

パネル2

名古屋市の開業医毛利孝一氏による医学史資料コレクションが、名古屋大学博物館に寄贈されました。ドイツ人医学者フーフェラント(C. W. Hufeland, 1762～1836)の原著や和訳本が中心です。

当時ヨーロッパ随一の名医とされたフーフェラントの、50年にわたる医療経験をまとめた“Enchiridion medicum”『医学必携』は、幕末の蘭方医(西洋医学者)に強い影響をあたえました。特に医師の職業倫理を扱った一章は、杉田成卿の名訳『医戒』によって広がり、心ある医師たちに今日まで、深い感銘と行動の指針をあたえてきました。

幕末の蘭方医とその後の医師たちは、『医戒』が示すヒューマニズム(人間の尊厳、平等、自由の尊重)に根ざした「西洋医学のこころ」とどのように向き合ってきたのでしょうか。

(解説)フーフェラントの評価については、「当時ドイツで最も名望の高かった医学者の一人」(川喜田、1977、p. 619)、あるいは「当時のヨーロッパ医界最高の医師とされ…」(高橋、2002、p.1048)との記述を参考にした。

ハンズオン1 『医戒』の拡大複製(冒頭の2丁を拡大したもの)

パネル3 (写真)

『医戒』について講演する毛利さん (高橋 昭 名大名誉教授提供)

パネル4

毛利孝一略歴

1909 (明治 42) 年 名古屋市生まれ
1934 (昭和 9) 年 名古屋医科大学 (名古屋大学医学部の前身) を卒業とともに、勝沼精藏教授の第一内科入局。一宮市立病院内科部長、院長を歴任
1946 (昭和 21) 年 戦地から戻って以来 1997 年まで、名古屋市内で内科医院を開業
1963 (昭和 38) 年 名古屋内科医会を創設 (1988 年まで初代会長)
2002 (平成 14) 年 逝去
愛知医科大学や名古屋大学で「医学概論」を担当するなど医学教育にも大きく貢献しました。3 度の臨死体験などを記した 7 冊の著書や医学史関係の論文が多数あります。(一部は参考書コーナーでご覧になれます)。

(解説) 毛利さんと、戦前の第八高等学校 (名大の前身校のひとつ) ドイツ語教師ハミツチュ氏 (L. H. Hammitzsch, 1909 ~ 1991) との親交はよく知られている。ハミツチュ氏はその後、著名な日本学者となったが、毛利さんは研究条件が悪かった彼に文献資料を送るなど、親身の援助を惜しなかった。氏も、毛利さんが 1 年間ミュンヘン大学医学部に留学した折には親切を尽くした。「毛利フーフェラントコレクション」にはハミツチュ氏の自筆献辞を添えて毛利さんに贈られた別刷が 31 編ふくまれている (ハミツチュ氏の経歴や業績については加藤 (2003) を参照のこと)。

パネル5 登場人物の生きた時代 (図3)

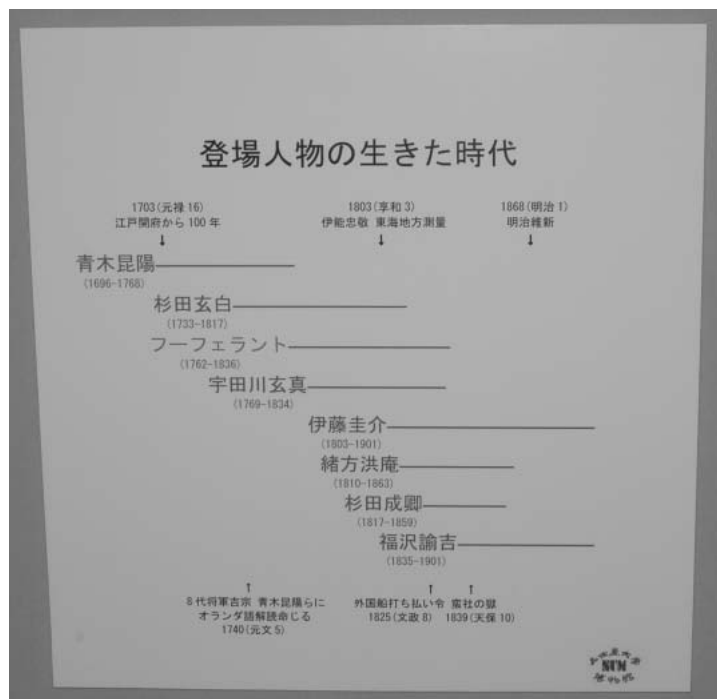


図3 登場人物の生きた時代 (パネル)

『『医戒』の世界 The book “Ikai”, as ethical and practical guides
for medical doctors』のコーナー（図4）

パネル6

毛利さんと『医戒』

毛利さんは、学生時代に『医戒』を手にして以来、この本を座右の書として日々の診療の精神的な支えにするとともに、フーフェラントを中心とした医学史関係資料を熱心に収集・研究しました。これが当館に寄贈された「毛利フーフェラントコレクション」です。

友人の日比野 進 名大名誉教授によると、毛利さんが日ごろ口ずさんだフーフェラントの言葉は次のようなものです。

- ・ 医の世に生活するは人のためのみ、おのれがためにあらず...おのれを捨て、人を救わんことを希うべし。
- ・ 病者に対しては、ただ病者を観るべし。（患者さんを社会的地位や貧富で差別してはならない）

こうした「思いやり」の診療は、患者さんから大変慕われました。脳卒中から回復してはじめて診療室に出た毛利さんに、一人の患者さんが唇をワナワナふるわせて「先生よかったな…嬉しいなあ…」と言って両眼から涙を溢れさせ、その涙にぬれた顔を彼の顔にすりつけたというエピソードが残っています。

（解説）毛利さんの生前のエピソードは、日比野（2002）による。



図4 「医戒の世界」コーナー

展示ケース 1

『医戒』

フーフェラントの『医学必携』の第21章医師の心得“Die Verhältnisse des Arztes”と題された医師の倫理・行動指針を述べた部分の翻訳です。杉田成卿（玄白の孫、略歴は後のコーナーをご覧ください）の手になるもので、1849（嘉永2）年出版。毛利さんが、学生時代にお父さんから京都土産にもらった品です。この本の複写は参考書コーナーでご覧になれます。

ドイツ語教材『医戒』（南江堂刊、初版と再版）

『医戒』の原文と注釈で、医学進学課程のドイツ語教科書として全国各地の大学で最近まで使用されました。展示品には毛利さんの書き込みがあります。

（解説）『医戒』の展示部分右ページを現代語表記すると次のようになる。

「その一 対病者の戒（患者さんへの心得）」

医その術を行うにあたりて、よろしくただ病者を見るべし。せつにその貧富大小を顧みることなかれ。およそ痛苦もつともはなはだしく生命もつとも危うき者、これを第一等の病者とす。その他は医の思うところに任せて可なり。世医あるいは病者の勢位と貧富とに従ってこれを軽重する者あり。これいまだ医治の最美、重賞を知らざるなり。予深くこれを憐れむ。それ一握の黄金もこれを貧士双眼の感涙に比せば何物ぞ。細かに察せよ。かの貧士は医に謝せんと欲するに言なく、酬いんと欲するに物なければ、ただ一身を医に委ねて…」

『医戒』の原文である『医学必携』第21章は、もとは1805年にドイツの雑誌の論文として発表されたものである（フーフェラント（1998）の訳者あとがきによる）。

『医戒』が教材に使用された例として、歌人として有名な土屋文明氏が、昭和初期、日本医大で倫理学の教材として『医戒』をドイツ語原文とともに使用したことが知られている（同あとがきによる）。『医戒』には複製本がある（1986年、清文堂出版、鈴木博編）。

パネル 7

『医戒』の言葉から（現代語意識）

- ・ 病気の人を見てなんとかしてこれを救いたいものだと思う気持ちこそが、医術の出発点でなければならぬ。（冒頭の有名な一文）
- ・ 貧しい患者が流す感謝の涙は、富んだ患者が謝礼に差し出す一握りの黄金と比べものにならないほど尊いものである。
- ・ 安価な薬で十分な場合には高価な薬を使わず、つとめて病人の経済的負担を軽くしなければならない。
- ・ 病人を（弓術の）「的」と考えるべきであって、（的を射る手段である）「弓矢」とみなしてはならない。実験を試みるような治療をしてはならない。
- ・ 患者には最後まで生の望みを持たせ続けるべきである。患者に不治の病であることを告げることは「死を与えること」になるから、命を永らえさせるのが仕事である医師たる者が絶対にすべきでない。（この考えが現代どのように扱われているかは、最後のコーナーで触れています。）

（解説）患者さんに病気の真相を告げることの是非をめぐって、毛利さんは著書『命よみがえる』（毛利、1973）のなかの一章「告げるか告げないか—死の受容をめぐって—」で情理を尽くして考察されている。

「西洋医学との出会いと吸収 Encounter with Western medicine and its mastering during the Edo Period」のコーナー（図5）

パネル 8

翻訳からの出発

江戸の鎖国時代には、西洋の進んだ学問は中国やオランダから、長崎を經由して主に書物の形で日本に入ってきました。よい辞書も語学指導者もなかった江戸時代中期、オランダ語の書物を翻訳しようとする人々が現れ、苦心の末に人体解剖学書『解体新書』を完成させます（1774、安永3年出版）。この本は、西洋言語から日本語への日本人自身による翻訳の最初であり、蘭学はここに始まりました。蘭学とは、西洋のいろいろな学問や技術を吸収・翻訳・普及することを言います。

その後蘭学は急速に発展しました。よい辞書や文法書があいついで出版され、外国船打ち払い令（1825、文政8年）の矢先に起きたシーボルト事件や蘭学者弾圧（蛮社の獄）といった逆風を乗り越えて、政治的・軍事的な色合いをも帯びながら、明治維新・文明開化につながって行きます。

杉田玄白著『蘭学事始』には、蘭学を創始した玄白をはじめとする先駆者の労苦が描かれていますが、毛利さんは1942年にこれをドイツ語訳しました。（参考書コーナーでご覧になれます）。

（解説）蘭学を準備したのは、儒者である青木昆陽（1696～1768）と本草学者である野呂元丈（1693～1761）とされる。8代将軍吉宗が西洋の進んだ学問（天文学、暦学、動植物学など）を実用的な立場で摂取する必要から、1740年、彼らにオランダ語の解説を命じたといわれる（磯野、2002）。青木はオランダ語の文法書などを出版し、野呂はオランダ語の動物学や植物学の書物をカピタン（オランダ商館長）との質疑応答によって翻訳して『阿蘭陀禽獣虫魚図和解』や『壬戌阿蘭陀本草和解』を作成した（これらは吉宗に献上されただけで、刊行されずに終わった）。

辻（1958）によると、吉宗はこれより先の1720（享保5）年、キリスト教布教に直接関係しない洋書の中国語訳の輸入・販売禁止措置をやめた（禁止措置は1630年に開始）。この波及効果として、中国語以外の外国語書籍（＝洋書）の輸入が盛んになったのである（もともと、洋書の輸入・販売は禁止されていなかった）。

蘭学者たちによる翻訳作業を通じた外国文化の吸収と、寺子屋に代表される基礎教育普及にむけた営々とした努力とがあったからこそ、明治維新以後の急速な近代化が達成されたといわれている。



図5 「西洋医学との出会いと吸収」コーナー

「翻訳からの出発」をことさらに卑下する必要はなかろう。近代科学発祥の地ヨーロッパでも、長い中世の停滞の結果、アラブ世界の学問が自分達よりもはるかに進んでいることに気付いた人々がこれに追いつくために最初にしたことは、やはり翻訳であった。

『蘭学事始』は、杉田玄白が83才で完成させた（2年後に死去）。原典は現存せず、写本のひとつが福沢諭吉の世話で1869（明治2）年に木版印刷で出版された。『蘭学事始』には、『解体新書』の原本である『ターヘル・アナトミア』を翻訳し始めた当初、櫓も舵もない船が大海に乗り出したようで、頼るものもなくただ茫然とするだけだったと書いてあり、先駆者の苦労が偲ばれる。『蘭学事始』をベースにした小説として、菊池寛著『蘭学事始』や吉村昭著『冬の鷹』などがある。

展示ケース 2

『解体新書』

1771（明和8）年、杉田玄白・前野良沢らが刑死者の腑分け（解剖）を見学した際、持参のクルムス著（オランダ語訳）『ターヘル・アナトミア』の図が実物どおりであることに驚き、西洋医学が優れていることを悟ってこの本の翻訳を決意し、3年後に出版。展示中の本文4冊の他、付図1冊があります。

[該当部分をひろげて示す] 江戸中期の漢方の産科医である賀川玄悦は、1766（明和3）年に出版した『産論』で、自らの医療経験にもとづき、胎児が母体内で逆立ちした状態にあることを正しく指摘しています。玄白は、「これまで自分が見たオランダの書物（『ターヘル・アナトミア』も含めて）には胎児の姿勢について明示されていない。イギリスの産科書の図によって子玄子（玄悦のこと）の説が正しいことを知った。玄悦の功績は立派である」という趣旨の長い注釈をくわえています。『解体新書』が単なる翻訳ではないことがわかります。

展示ケース 3

『和蘭内景銅版図』

1808（文化5）年、『和蘭内景医範提綱』という解剖学書の付図として出版され、優れた人体解剖図譜としてひっぱりだこになりました。銅板画によるものとしては日本最初とされます。オランダの数種類の解剖書から集めた原図をもとに、永田善吉（亜欧堂田善）が銅版画を製作しました。著者宇田川玄真は伊勢出身の著名な蘭学者で、『医戒』の訳者杉田成卿は彼の孫弟子にあたります。

「フーフェラントと幕末の蘭方医 Hufeland and Japanese medicine towards the end of Edo Period」のコーナー（図6）

パネル 9（肖像画）

C.W. フーフェラント

『医学必携』原書6版（1842年刊）の扉の肖像画を複写拡大しました。



図6 「フーフェラントと幕末の蘭方医」コーナー冒頭部

パネル10

フーフェラント (1762～1836)

ドイツ(当時ワイマール公国)のチューリンゲン出身。1783年ゲッティンゲン大学を卒業し、父を助けて町医師として10年間活動後、イエナ大学教授やプロイセン宮廷医兼慈善病院(シャリテ)長、ベルリン大学医学部長を務めました。

右目失明やナポレオン軍侵攻にともなう苦難を経験しましたが、晩年は平安で、ヨーロッパ随一の名医として尊敬されました。カントをはじめとした啓蒙思想家と親交があり、それが彼の多数の著作に反映されています。自然治癒力を重視した医療を行うとともに、天然痘予防の種痘を熱心に推進しました。彼の『長生法』(長生きの秘訣集)は現代でも読まれています。

幕末の蘭方医に絶大な信頼を受け、『医学必携』だけでなく、他の著作も翻訳されて広まりました。

(解説) フーフェラントは「自然治癒力を重んじたヒポクラテス主義者」(川喜田、1977、p. 619)と位置付けられている。この評価にふさわしく、フーフェラントは、問診による医師と患者との交感(ラポール)を重視した。

毛利さんの著書『命ふたたび』(毛利、1982)の問診に関する記述を以下に引用する。「問診が病気の診断に不可欠の要素であると同時に、治療の上にも大きな役割を演じていることを、臨床家は誰でも経験を重ねるにつれて悟るのではないだろうか。患者と向かい合っているいろいろ尋ねているうち、患者と自分との間にいつとはなく、あるいは突然に、お互いの心の窓が開いて通じ合うような手ごたえを感じる…こうしたrapportラポール(疎通性、特に医師と患者との対人関係)が、治療にとって好ましいプラス、ときには本質的に必須の要件であることは間違いないだろう。…これはコンピューターをはじめとした数々のME機器も及ばぬ領域と思われる…」(p. 154)。

ところで、朱子学による儒教道徳が支配的だった当時の日本で、西洋のいわゆる啓蒙思想に基づくヒューマンズムがなぜ広く受け入れられ、歓迎されたのだろうか。それに対する一般的な見解を以下に示す。「徳川末期に、何故に扶氏『医戒』が爆発的に医師の間に強く広がり、根を下ろしたかと言えば、これは当時の医家の教養であった儒学と何か一脈通ずるものがあつたからである。…儒学の仁[は]、扶

氏の「私心を去って天の自然に従う」観念と相通ずるところがあるからである…」(阿知波、1982、p. 214)。事実、蘭学塾に入学する前に儒学や漢方医学を学んだという例は少なくない(田崎、1985)。杉田成卿もこれに当てはまる。逆に、蘭学者が国学に傾倒した例も知られている(同)。

なお、フーフェラントの出身地旧東ドイツでは、「医療界における行動のヒューマストとして尊崇され、毎年慣例として保健、医療の実践面で実践で貢献した団体や個人にフーフェラント・メダルが[国家から]授与されてきた」(フーフェラント(1998)の訳者あとがき、p. 157)が、現状は不明である。

パネル11

江戸の医師たちとフーフェラント

江戸時代には、現代のような国家試験による医師免許制度はなく、医師志望者は多くの場合、個々の医師に弟子入りして修行しました。したがって、今日にも増して、技量や倫理の点でさまざまな医者がいたようです。蘭方医も例外ではなかったといわれます。

幕末の心ある医師たちにとって、ヨーロッパ随一の名医とうたわれたフーフェラントの著作は、待ち望まれていたものでした。筆写され、複製本が出され、翻訳されて全国に広がりました。

(解説) 江戸時代における医師の地位について、次のように言われている。「医師というものに対する村人、また為政者の見る眼は、近代の一般人が見るのとだいぶ違っていた。士・農・工・商の埒の外にある、特殊な技芸者のように見えて、僧、山伏、医師という系列が考えられ、一目置かれはするが、身分が高いわけでもなく…」(有吉佐和子著『華岡青洲の妻』、新潮文庫版の和歌森太郎による解説から)。もちろん、藩医という公職を与えられた人が少なくなかったのも事実である。

当時、医者なかで蘭方医がどのくらいの割合を占めていたか、あまりはっきりしていない。明治6～8年のデータによると、愛知県渥美郡(当時)豊橋に居住した医師22名中、西洋医学を学んだものは6名いて、27%にあたる(田崎、1985)。

医師の国家資格制度として、日本では1874(明治7)年、医事制度を統一した最初の法規として「医制」が公布されて、制度の整備が開始された。「医制」のなかで開業許可制が示され、翌年から府県単位で、新規に医師を開業する場合について医術開業試験が実施されはじめたのである(公布の当初は、すでに開業している場合には届け出るだけでよかった)。

パネル12

フーフェラント『医学必携』の日本語訳

フーフェラント(扶氏)の50年におよぶ診療経験をまとめた“Enchiridion medicum oder Anleitung zur medicinischen Praxis”『医学必携』は、1836年出版直後に売り切れ、フーフェラントが病床で増補した第2版が死の直前に出版されました。以後、内容がほとんど変更されずに第10版(1857年刊)まで出版されたベストセラーでした。

原著第2版をもとにしたオランダ語版(1838年刊行)が日本に輸入され、日本語訳が別々の表題をつけられて以下のように出版されました。(訳者杉田成卿はドイツ語原著も参照したといわれます)

第1、2章 → 察病亀鑑(青木浩齋)、扶氏診断(山本致美)

第3章 → 扶氏診断(山本致美)、

(毛利孝一、1983、ドイツ語原著より論文の一部として)

第4章 → (毛利孝一、1983、ドイツ語原著より論文の一部として)

第5～19章 → 扶氏経験遺訓 (緒方洪庵)

第20章 → 濟生三方 (杉田成卿)

第21章 → 医戒 (杉田成卿)

第22章 → 扶氏経験遺訓 (緒方洪庵)

章の番号は、原著やオランダ語版にはありませんが、毛利さんによってつけられました。

(解説) 杉田成卿がドイツ語原本を参照したことは、阿知波(1982)や宮永(1993)による。

『医学必携』オランダ語版を筆で書き写したものは、福井市博物館(毛利、1980)と東京大学史料編纂所(NACSIS Webcatによる)に所蔵されている。また翻刻(複製)については、第20～21章、つまり日本語訳の『濟生三方』と『医戒』に相当する部分が、木版本として1857(安政4)年に杉田玄端(成卿の義弟)によって出版された(杉本、1992)。他方、宮下(1997)は、『察病亀鑑』ないし『扶氏診断』に相当する部分が、杉田玄端によって『内治全書』との日本語タイトルを付され、木版翻刻本として1857年に出版されたとしている。木版翻刻本が2種類あるとも考えられる。

翌1858年には、『医学必携』オランダ語版の金属活字による翻刻本が、多摩郡相原村(現町田市相原町)に住む適塾出身の医師青木芳斎(湯浅方斎)と同心秋山佐蔵によって出版された。なお、青木と秋山は、その他の蘭書2点も金属活字で翻刻した。使用された活字の母型2個は、早稲田大学図書館が保管している由である。

『医学必携』の一部が翻訳されながら出版に至らなかったものとして、宮下(1997)は、『牛痘種法編』(池田洞雲・伊東玄朴訳)、『牛痘種法・偽牛痘』(小関三英訳)、『扶歇蘭度勞 編』(松村太伸訳)を挙げているが、杉本(前記)によるとまだ他にもある。

展示ケース4

フーフェラント『医学必携』ドイツ語原著第3版(1837年刊)

ひらいてあるところは、『医戒』として翻訳された章の始めの部分です。

フーフェラント『医学必携』オランダ語版 全2巻(1841年刊)

原著第2版のオランダ語版(1838年)が日本語訳に使用されましたが、ここに展示してあるのは少し後の1841年版です。両者の内容は同じですが、構成が少し違います。翻訳者はアムステルダム生まれの医学者ハーヘマン(H. H. Hageman Jr., 1813～1850)です。

『扶氏診断』

『察病亀鑑』とほぼ同じ部分を、大洲藩(愛媛県大洲市)侍医の山本致美が翻訳して1858(安政5)年に出版したものです。両者を比較してください。

『察病亀鑑』

因州(鳥取県)の青木浩斎の翻訳により1857(安政4)年刊。『医学必携』のうち、自然良能(自然治癒力)を重視した序論と診断法に関する解説です。

『濟生三方』

杉田成卿の訳で、もともと1849(嘉永2)年に『医戒』とともに刊行されましたが、1856年には門人の橋本左内が補訂した再刻が出版されました。展示品は1861年に当時としては珍しい木製活字によって新たに製作されたものです。「三方」すなわち三大治療法とは、刺絡(静脈血を出すこと)、阿片、吐薬です。

『幼幼精義』

『医学必携』ではありませんが、フーフェラントの別の小児科書をサクセ (J. A. Saxe、薩屈設) がオランダ語に翻訳したものを堀内素堂が訳し、1843～1849年に出版しました。

(解説)『医学必携』にはフランス語版(1848年刊)もある。『扶氏診断』は、1872(明治5)年に再版が出版されている。『幼幼精義』の訳者堀内は、杉田立卿(玄白の子、成卿の父)の弟子で米沢藩の藩医を務めた。展示中の他の和本と違い、漢文で記されている。

展示ケース5

『扶氏経験遺訓』

緒方洪庵訳。1842(天保13)年ごろまでに初稿本が完成しました。それ以来、蘭学への規制が強まるなかで、推敲を重ねながら出版の機会をうかがい、ついに1857年に出版を始め1861年に完了しました。全30巻のうち最後の3巻(付録)は訳者が新たに書いたものです。10冊に分けて綴じられています。すでに初稿の段階から写本で広がりました。

[該当部分をひろげて示す] 巻18にある牛痘法についての訳注です(訳者云ク…)。カンスタットの新聞(1848年刊)を紹介しています。なお、牛痘法は1849年から日本でも洪庵などによって始められましたが、そのことにも触れています。

『扶氏経験遺訓』

日比野 進 名大名誉教授寄贈

3冊に分けて綴じたものです。開いてある部分の左ページが版木の向かって左半分に相当します。

『扶氏経験遺訓』の版木

適塾記念会蔵

『扶氏経験遺訓』の8巻14丁の部分です。裏には13丁の部分が彫られています。緒方洪庵が自費で版木を彫らせ、多数の版木が緒方家に保管されていました。残念なことに、火災などのため、現存するのはこの1枚だけです。和紙に刷って半分に折り、袋になっていない方を糸で綴じると、となりに展示してあるような「和綴じ」の冊子ができあがります。

(解説)『扶氏経験遺訓』の出版までの経緯は、中村(1989)による。

『扶氏経験遺訓』には、展示品のように10冊あるいは3冊に分けて綴じたもの以外に、30冊セットがある。

展示中の3冊本には、「中島三伯」という蔵書印がおされている。中島三伯は尾張徳川家義宣の侍医であり、漢蘭折衷医として知られている。彼は、1870(明治3)年、藩医の石井隆庵や伊藤圭介とともに、洋医学校を名古屋にも設立すべきことを名古屋藩に建議した。伊藤圭介らの尽力で大きな成果を収めていた名古屋藩種痘所を、西洋医学に基づく医療と教育の場として大幅に拡充することを提言したのである。それが実って、翌年に仮病院・仮医学校がスタートしたが、これが名古屋大学の出発点とされる。つまり中島は、名古屋大学の生みの親とも考えられる。その点からも、この3冊本は名古屋大学にとって貴重なものと言える。

『名古屋大学50年史通史1』によると、中島が明治3年、義宣に「扶氏処方二百六十一方を調上候」との記録が残っている。すなわち、『扶氏経験遺訓』の薬方編にリストされている処方の第261番を調剤したのであるから、中島が『扶氏経験遺訓』を所蔵していたことが推測されるが、その現物がここに展示されたわけである。



図7 「フーフェラントと幕末の蘭方医」コーナー中央部

パネル13

『医戒』の訳者、杉田成卿（1817～1859）

江戸浜町（東京都中央区日本橋）生まれ。杉田玄白の孫。漢学や儒学を修めた後、坪井信道の蘭学塾に入門しました。緒方洪庵の弟弟子にあたります。オランダ語だけでなくドイツ語・ラテン語・ロシア語も解する抜群の語学力により、1840（天保11）年から1854（嘉永7）年まで幕府天文台訳員として『海上砲術全書』や、医学書『濟生三方』・『濟生備考』など多数の書物を翻訳するほか、オランダ国王やペリー提督の幕府あて国書を訳しました。1845（弘化2）年に若狭酒井藩の侍医となり、1856（安政3）年には蕃書調所の教授職となりましたが、43歳で病死しました。

1855年の安政大地震で焼け出された時も、フーフェラントの原書だけは持ち出したと伝えられています。洋書を広く読破するなかで、西洋諸国の「フレイヘイト」（精神の自主と思想の自由）に深く共鳴しました。明治の自由民権思想を先取りした学者でした。

（解説）杉田成卿の業績や思想については、杉本（1992）に詳述されている。杉田の「自由民権」的思想については、次の文章が参考になる。杉田は「又嘗て政治書を訳せしより心を西洋諸国の政体風俗に用いしかば、始めて『フレイヘイト』と云る趣義を見出されたり。こは英国の『フリーダム』と同語にて、乃ち精神の自主と思想の自由とをもて人身の権理を維持する説なり。今の世の人の民権と云い自由と唱え事新しき状に説きはやせども、先生が数十年前に夙くもこの首唱ありつることを知らざりき。然れどもその時世は高橋（景保）、渡辺（華山）、高島（秋帆）等の諸子が外国の事を説き出して罪を幕府に獲しおりなれば、先生も身に禍を招かんことを恐れ、自ら慎しみ戒めて、濫りにこれを口より言い出さず、唯その心を傷むる苦しさを酒に遣りて、酔えばやがて『フレイヘイト』と呼びて止まざりしとぞ」（大槻如電編『梅里遺稿』（1885年）所収、古在（1969）より引用、梅里とは成卿の号）。実際、明治になって自由民権運動に投じた在村の蘭学者の存在が知られている（田崎、1985）。

なお、杉田の著書『濟生備考』には影印がある（恒和出版「江戸科学古典叢書」29、1980年）。

パネル 14 (図7)

手塚治虫『陽だまりの樹』に描かれた『扶氏経験遺訓』

©手塚プロダクション／小学館

『陽だまりの樹』は、作者手塚治虫の祖父にあたる手塚良庵を、主人公伊武谷万次郎をかこむ一人として描いた長編漫画です。このシーンでは、良庵が不熱心な勉学態度を先生である緒方洪庵から叱られ、『扶氏経験遺訓』の学習を勧められています。ここで良庵が「十二条の医戒」といっているのは、『扶氏医戒之略』のことです。

パネル 15

緒方洪庵と適塾

緒方洪庵(1810-1863)は17才で郷里備中(岡山県)を出て、大阪と江戸で蘭学修行の後、長崎でオランダ医学を学びました。1838(天保9)年、大阪で適塾を開き、塾生は北海道から九州まで636名に達しました。日本の近代化に貢献する人材が巣立ちましたが、橋本左内(安政の大獄で刑死)、大村益次郎(村田蔵六)、福沢諭吉、長与専齋といった著名人ばかりではなく、郷里に帰って医療を行うとともに寺子屋を開いて村童の教育にもあたった無名の人々も多数含まれます。

洪庵は牛痘法(天然痘を防ぐため、牛の天然痘を接種する種痘のこと)の普及に貢献しました。1849(嘉永2)年、民間の力で大阪に除痘館が設立され、接種する「苗」はここから関西一円に短期間に配布されました。こうして蘭方医が中心となって全国で種痘の実績があがったことが大きな力となり、幕府は漢方から蘭方へと医療政策を転換しました。

(解説) 洪庵や適塾の歴史は、緒方(1977)や伴(1978)による。

蘭方が幕府に公認される第一歩は、1858(安政5)年に蘭方禁止令(1849年制定、ただし外科と眼科は禁止令から除外)が撤廃されたことである。大阪の除痘館が1858年に幕府公認となり、江戸でも「お玉が池種痘所」の設置が幕府から許可された(それまで江戸に種痘所はなかった)。なお、公的=官立の医学教育としては、「医学館」が1791年から1868年まで漢方医を養成する一方、蘭方は「種痘所」で1860年から開始された。「種痘所」は1861年に「西洋医学所」と改称され、1868年には「医学館」を吸収した(おもに石田(1992)による)。

種痘の普及について、吉村昭著『雪の花』には、北陸地方における種痘の中心人物である福井藩の実在の町医(後に藩医)、笠原良策の苦闘が感動的に描かれている。

パネル 16 (図7)

緒方洪庵

将軍の侍医および西洋医学所第二代頭取に就任するため江戸に向うにあたって描かせた肖像画の複製です。洪庵はそのわずか10ヶ月後、54歳で急死しました。

(解説) この肖像の原本は、画家藪長水に描かせ、除痘館に残したものである。和歌と漢文は洪庵の自筆で、種痘への熱意が表現されている(解説は梅溪昇大阪大学名誉教授による:梅溪・芝(2002)所収)。

和歌:としことに(歳ごとに) おひそうのへの(生い沿う野辺の) こまつ原

ちよにしけれと(千代にしけれと) うゑもかさねむ(植えも重ねむ)

漢文(識語):文久壬戌(文久2年、1862年)初秋 将東行(まさに東行せんとし) 遺小照於壁間

(小さな肖像を壁間に遺す) 蓋欲留我神志於此館也(けだし我が神志を此の[除痘]館に留めんと欲するなり)

「うゑもかさねむ」は、種痘苗(天然痘ワクチン)を人から人へと植え継ぐことを意味している。当時はそれしか、「苗」を維持する方法がなかった。種痘が実施された始めのころ、人(幼児)を見つけて次々に植え継いで行く苦労は大抵でなかった。

パネル17 (扁額の解説)

扶氏医戒之略

緒方洪庵(公裁)が杉田訳『医戒』を参考にして、フーフェラント『医学必携』第21章を1857(安政4)年に翻訳し、12条にまとめて書きしるし、自戒をこめて彼の適塾に掲げていたものの複製です。福沢諭吉をはじめ、新時代を担うことになる多くの塾生がこれを眺めたことでしょう。この複製は洪庵没後百年記念に適塾記念会が作成したもので、勝沼精藏名古屋大学名誉教授(名大第三代学長)の遺品を毛利さんが額にして、診察室に掲げていました。(内容は、チラシでご覧いただけます。)

(解説) 展示してある複製は緒方家所蔵品にもとづくもので、1963年、洪庵の没後百年記念に適塾記念会から複製刊行された。活字化されたものは、緒方(1977)や日本近代思想体系14「科学と技術」(飯田賢一校注、岩波書店、1989年刊)で見ることが出来る。現存する洪庵自筆の「扶氏医戒之略」はこの緒方家所蔵品をふくめて4点といわれる(富安、1985)。

チラシは、洪庵が八重夫人の弟・億川信哉に清書してあたえたものの縮小複製とその読み下し文で、冒頭部がやや異なり扁額の末尾にある自警云々も省かれています(内容的にはほぼ同様のものが緒方家にも別に所蔵されている)。このチラシは、医道顕彰会と日本医師会が共同して、毎年、新卒医学生全員に贈っているものを、両会の許可を得て複製した。なお、億川家所蔵品の完全な複製は大阪大学適塾記念会から、1963年に赤堀四郎教授の解説を付して、さらに1969年と1970年(再刊)には緒方洪庵の画像および藤野恒三郎教授の解説冊子とともに刊行された。

4点目は、適塾に学んだ遠州浜名郡境宿村(現在の静岡県湖西市)出身の跡見玄山が、1857(安政4)年3月に帰郷するはなむけとして師の洪庵から送られたものである(跡見家所蔵)。玄山は郷里で医師を開業し、種痘も行っている(田崎、1985)。

なお、「扶氏医戒之略」には「胡佛並徳氏医徳十二箴」と題された中国語訳もある(フーフェラント(1998)の訳者補遺による)。



図8 「フーフェラントを超えて」コーナー

「フーフエラントを超えて—現代における「医の倫理」 Beyond Hufeland :
“Informed consent” as a code of modern medical ethics」のコーナー (図8)

パネル18

幕末におけるインフォームド・コンセント

—不破家の手術記録から—

美濃国中島郡不破一色村(岐阜県羽島市正木町不破一色)の医師、不破為信則明と為信惟治親子は、華岡青洲の弟子および孫弟子にあたる外科医です。親子による乳癌の手術記録には、現在のインフォームド・コンセント(医師の説明にもとづく患者の同意による医療)に近い行為が記録されています。展示されているのはその最も古い例で、1847(弘化4)年のものです。

不破家手術記録は、子孫の医師不破洋氏と名古屋大学医学部の山内一信教授によって研究されました。

(解説) 研究成果は、山内・不破(1996)として出版されている。また、手術記録(絵図)は不破医院のホームページ上の画像データベース(<http://www.mirai.ne.jp/~dhf/fuwaiin>)で見ることができる。



図9 ハンズオンコーナー

展示ケース6

不破家の手術記録

不破 洋氏 蔵

「翻花」(体の表面まで病変が現れること)があるから治療を固辞したが、患者の強い願いによってやむなく乳岩(=乳癌)の摘出手術を行った、と記されています。

種痘をするための器具

本荘平八氏 寄贈

専用の小型メスで皮膚につけた傷に、ガラス管から取り出した天然痘ワクチンを、べっ甲でできた「さじ」ですくいにとって塗りつけます。この器具は、1886(明治19)年から1935(昭和10)年まで愛知と岐阜で開業していた医師本荘鈴平氏によって使われていたものです。メスの刃が研ぎ減っています。

天然痘が絶滅したので種痘はすでに過去のものになったと言いたいところですが、生物兵器として天然痘ウイルスが使われるおそれから、天然痘ワクチンは現在でも備蓄されています。

(解説) 展示してある小型メスは正式には「種痘用ランセット」と呼ばれる。日本では、種痘の徹底のおかげで1955(昭和30)年より後には国内感染者は出ていない。全世界的に天然痘が根絶されたのは1980(昭和55)年のことである(WHOによる宣言)。これ以降、大部分の国では種痘をやめている(内藤記念くすり博物館編『天然痘ゼロへの道』、1983による)。

パネル19

現代の「期待される医師像」

『医戒』に示されたフーフェラントの思想には、現代にもそのまま通じる部分が多いのですが、現在のインフォームド・コンセント(説明と同意)の考え方とは異なります。

「説明と同意」の考え方は1960年代にアメリカで始まったもので、医師の能力と判断力だけで独善的に一方的に進める医者態度を批判し、患者の人権擁護を目指したものです。近年、日本でもこの考え方が定着してきています。

(解説) この文章は、星野(1991)を参考にした。

ハンズオン2～ハンズオン4 [『察病亀鑑』、『済生三方』、『扶氏経験遺訓』の訳者紹介](図9)

参考書ハンズオンコーナー(図10)

- ・毛利孝一氏のドイツ語訳『蘭学事始』(Mori, 1942)、その他の医学史関係論文コピー
- ・毛利孝一著『生と死の境』東京書籍、『命よみがえる』金剛出版
- ・『医戒』(コピー)
- ・『蘭学事始』岩波文庫(緒方富雄校注)、および講談社学術文庫(片桐一男全訳注)
- ・『解体新書』(酒井シズ現代語訳)、講談社学術文庫
- ・フーフェラント(杉田絹枝・杉田勇訳)『自伝／医の倫理』北樹出版
- ・杉本つとむ『江戸蘭方医からのメッセージ』ペリかん社
- ・星野一正『医療の倫理』岩波新書
- ・手塚治虫『陽だまりの樹』小学館
- ・吉村昭著『冬の鷹』新潮文庫、『雪の花』新潮文庫
- ・毛利フーフェラントコレクションのリスト(西川、2002)



図10 参考書コーナー

英文チラシ

会期中に会場で配布した英文チラシを図 11 に示した。

文 献

- 阿知波五郎 (1982) 近代日本の医学—西欧医学受容の軌跡—。思文閣出版, 京都, 4 pls, xv, 403+2 (ページ番号なし), xv p.
- 伴 忠康 (1978) 適塾をめぐる人々—蘭学の流れ。創元社, 大阪, iv+5 (図版番号なし), 48 図版, 216.
- フーフェラント (杉田絹枝・杉田勇訳) (1998) 自伝／医の倫理。北樹出版, 東京 [1995年初版、1998年に初版第2刷で改訂], 168, xiv p.
- 日比野 進 (2002) 毛利孝一博士を偲ぶ。名古屋内科医会会誌, **111**: 9-11.
- 星野一正 (1991) 医療の倫理。岩波書店, 東京, x, 240.
- 石田純郎 (1992) 緒方洪庵の蘭学。思文閣出版, 京都, vii, 341, xiv p.
- 磯野直秀 (2002) 日本博物誌年表。平凡社, 東京, 837, 100.
- 加藤詔士 (2003) 外国人教師のみた名古屋大学。名古屋大学史紀要, **11**: 17-90.
- 川喜田愛郎 (1977) 近代医学の史的基盤 下。岩波書店, 東京, xi, 578-1226, 160.
- 古在由重 (1969) 和魂論ノート。“岩波講座哲学Ⅷ 日本の哲学”(古田 光・生松敬三編), 岩波書店, 東京, 249-334.
- 宮永 孝 (1993) 日独文化人物交流史—ドイツ語事始め。三修社, 東京, 501.
- 宮下三郎 (1997) 和蘭医書の研究と書誌。井上書店, 東京, 4+149.
- Mori, K, (transl.) (1942) Rangaku kotohajime 蘭学事始 (Die Anfänge der “Holland-Kunde”) von Sugita Genpaku (1733-1818). *Monumenta Nipponica*, **5**: 144-166.
- 毛利孝一 (1973) 命よみがえる。金剛出版, 東京, 306.
- 毛利孝一 (1980) 「エンシリディオン・メデイクム」私記。医家芸術, 1980年9月号, 46-49.
- 毛利孝一 (1982) 命ふたたび。中日新聞本社, 名古屋, 4 (ページ番号なし), 319.
- 中村 昭 (1989) 緒方洪庵『扶氏経験遺訓』翻訳過程の検討。日本医史学雑誌, **35**: 229-260.
- 西川輝昭 (2002) 名古屋大学博物館所蔵「毛利フーフェラントコレクション」リスト。名古屋大学博物館報告, **18**: 91-97.
- 緒方富雄 (1977) 緒方洪庵伝 (第2版増補版), 岩波書店, 東京, 4 (ページ番号なし), 637.
- 杉本つとむ (1992) 江戸蘭方医からのメッセージ。ペリかん社, 東京, 322.
- 高橋 昭 (2002) 日本の臨床神経学の生い立ち。臨床神経学, **42**, 1044-1053.
- 田崎哲郎 (1985) 在村の蘭学。名著出版, 東京, 300.
- 富安廣次 (1985) 緒方洪庵「扶氏医戒之略」—億川家、緒方家、跡見家各所蔵の比較—。適塾, **18**, 133-141.
- 辻 達也 (1958) 徳川吉宗。吉川弘文館, 東京, 4, 229.
- 梅溪 昇・芝 哲夫 (2002) よみがえる適塾：適塾記念会50年のあゆみ, 大阪大学出版会, 吹田, iii+208.
- 山内一信・不破 洋 (1996) 不破家華岡流手術記録の検討。日本医史学雑誌, **42**, 61-76.

会期中に行われた博物館特別講演会

第27回 2003年10月1日(水) 14:30～16:00

「毛利孝一博士を偲ぶ」(日比野 進氏、名大名誉教授)

第28回 2003年10月23日(木) 14:30～16:00

「フーフェラントを超えて—幕末から今日に至るインフォームドコンセント」

(山内一信氏、名大医学部教授)

C. W. Hufeland and Japanese Medicine in Edo Period

The present display is based on Dr. Koichi MOORI' s (1909–2002) medical literature collection, recently donated to the Nagoya University Museum, featuring a famous German professor of medicine, Dr. Christoph Wilhelm HUFELAND (1762–1836).

During his career as a medical practitioner for more than 50 years, Dr. MOORI was devoted to the book “Enchiridion medicum”, especially the chapter entitled “Die Verhältnisse des Arztes” on ethical and practical guides for medical doctors, since he was much impressed by the Japanese translation of the chapter when he was a medical college student. HUFELAND' s guides still remain alive in modern Japan among humane persons.

The display focuses on how Japanese doctors and scholars encountered and understood the then much advanced Western medical science and its underlying philosophy of humanism towards the end of the Edo Era.

1. The book “Ikai” , as ethical and practical guides for medical doctors

The book “Ikai” as a Japanese translation of “Die Verhältnisse des Arztes” by SUGITA Seikei (1817–1859), published in 1849, and some important sentences from the book.

2. Encounter with Western medicine and its mastering during the Edo Period

The book “Kaitai Shinsho” , as the first translation (with notes) of Dutch scientific books, represents the beginning of “Rangaku” (studies of Dutch and other Western languages, science, and technology).

3. HUFELAND and Japanese medicine towards the end of Edo Period

Life of HUFELAND with his portrait, the Japanese translations of his “Enchiridion medicum” , and a woodblock for printing a page of the translations are exhibited. Also shown are the lives of SUGITA Seikei, and another talented scholar OGATA Koan(1810–1863) with a copy of his hand-writing of an abbreviated translation of the “Verhältnisse” .

4. Beyond HUFELAND : “Informed consent” as a code of modern medical ethics

A very early and primitive example of “informed consent” in Japan, shown by a medical document of a surgery in 1847.

会期中に行われた博物館コンサート (NUMCo)

第9回 10月1日(水) 12:30～13:15

無伴奏フルートコンサート 宇佐美敦博さん

演目：シリシクス（ドビュッシー）、風の歌（J. ドンジョン）、恋する女羊飼（フェルマー）、スペインのフォリアによる変奏曲（マレ）、冥-MEI-（福島和夫）、 Rondoh 短調（クーラウ）、エア（武満 徹）



図12 博物館入り口のにぎわい